

報 告

International Society for Prosthetics and Orthotics
17th World Congress (ISPO2019) 参加報告埼玉県総合リハビリテーションセンター 医療局リハビリテーション部
リハビリテーション工学科 河合 俊宏

1. はじめに

2019年10月5日から8日に渡って、ISPO2019が開催され、参加したので報告する。

ISPOは、国際義肢装具協会と和訳されることが多い義肢装具学・リハビリテーション工学の協会であり、隔年ごとに世界大会を主催している。

今回のISPO2019は、日本の神戸で開催された。

神戸では、30年前にも開催されており、日本国内では2回目の開催であった。

2. 概要

テーマとして、「Basic to Bionics」が掲げられ、世界中から、約5,000人以上の参加者があった。

教育講演に、シンポジウム、基礎講座、応用講座、口頭発表、ポスター発表、出展社ワークショップ、そして展示会場ブースでのセミナーと、多種のイベントが満載であった。セレモニーに加えて、レセプション、パーティ、そして参加していないがツアーも開催されたようである。

講座や口頭による発表は、カテゴリーとしては、義肢（下肢・上肢）・装具（下肢・上肢 / 脊椎）・発展途上国への支援 / 教育・計測と評価 / 社会問題 / QOL・リハ医療&手術・その他に分類されていた。

ポスター発表は、17のカテゴリーに分けられていた。

3. 感想

筆者自身初参加ということもあり、ポスター発表をした。カテゴリーとしては、Seating & Wheelchair

で、日本国内ではほとんど類似症例が無い骨盤半裁に関するものにしたのであるが、全く関心を持たれず、残念であった。同カテゴリーの口頭発表は1セッション5題あったようだが、ポスターは当方1演題という状況であった。セッションは100以上構成されていたので、場違いなのか、問題視されないのか、微妙な4日間ではあった。反面、教育に関するものや、3Dプリンティングに関する、その場での解決策の例としては、Wheelchairを題材にされる講座が数種類開催された。これからISPOとしてカテゴライズを重視していくのか、どうかを見極めてゆきたいとも感じた。

最後に、昭和の時代に教育を受けたものとしては、Bionicsとは懐かしい用語を使うなあといったところであったが、教育講演でもふれられたOsseointegrationの発達には驚嘆した。昔は生体直結義肢と和訳されていたが別次元のものであった。応用講座で聞いた範囲だと1,200件もオーストラリアを筆頭として世界6か国で手術がされ、実用動作しているとのことであった。展示会場でも数名の方を見かけた。

人工臓器・再生医学に限らず、多くの知見を、リハビリテーション工学が取り入れてゆく必要性を、実感した大会であった。

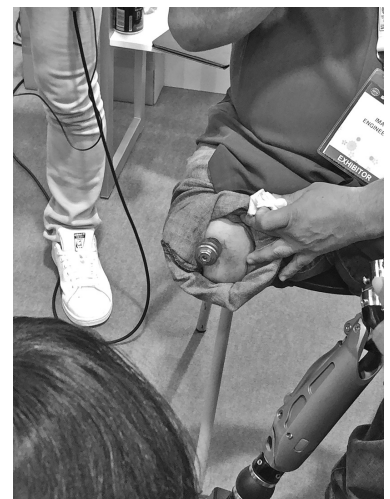


図1 右大腿切断者のOsseointegration

【参考文献】

陳隆明：第17回国際義肢装具協会世界大会（ISPO 世界大会2019）を終えて、日本義肢協会誌，Vol.121，26-27，2020

埼玉県総合リハビリテーションセンター
リハビリテーション工学科
〒362-8567 上尾市西貝塚148-1